

# 馳越



明治の治水

「神通川馳越線工事」によって神通川は直流となった  
「馳越」をめぐる人々の物語

## はせこしものがたり 馳越物語

神通川馳越線工事って  
何だろう？  
[前号のおさらい]



1 かつての神通川は、富山城の北側で蛇行しており洪水が絶えなかった。  
※7ページ左上の地図参照



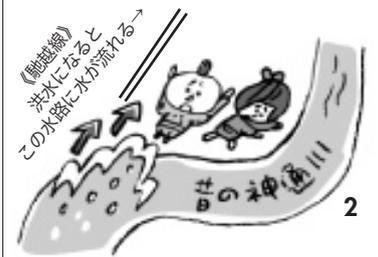
3 明治36年には「馳越線」の完成に合わせて神通大橋が架けられた。



4 旧神通川の跡地「廃川地」は、富岩運河を掘った土砂によって埋め立てられた。



5 現在その「廃川地」は、県庁、電気ビルなどが建ち並ぶ中心市街地になっている。

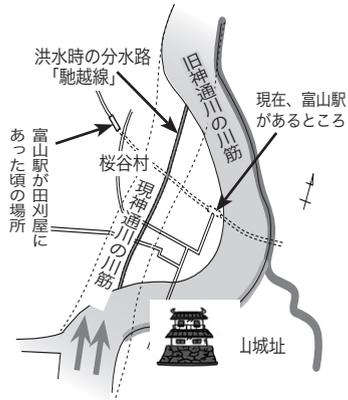


2 明治34年、テ・レーケの提案によって洪水時の分水路となる「馳越線」を開削。

●大正3年8月14日未明、記録的な豪雨が暴れ川を呼び覚ました。

# 神通川の直流化を決定づけた大洪水

明治の治水「馳越線工事」によって、今から百年前の明治36年「旧神通川の蛇行部分を直線でつなぐ分水路「馳越線」が完成した。幅2メートルの分水路は、洪水の度に激流によって大きく削られ現在の川幅にまで成長。結果、馳越線が本流となった。この直流化をいよいよ決定づけたのが、大正3年8月13日に起こった大洪水だと言われている。大河が直流



になるほどの洪水、それは一体どんなものだったのか。「桜谷郷土史」と当時の新聞「北陸政報」から探ってみよう。  
—8月13日午前5時頃から県下は豪雨に見舞われた。地面を叩きつけるように降り続く雨。人々は心配した。また川が暴れ出すのではないかと。伏木測候所観測によると、午前6時からの4時40分間で159.5ミリの降雨量(創立以来最大)を記録。特に神通、井田、山田、常願寺、熊野各川の被害は甚だしく、堤防を破壊し、橋梁を流失。浸水家は6850戸に及んだ。

馳越線川筋も同様、大橋下流の堤防は決壊し、濁流は家屋を衝いた。剛胆堅牢で知られた桜谷村の某邸宅は床上5尺(約150センチ)の水害を被ったが、これなどはまだいい方で、完全に流出してしまった家は桜谷だけで13戸にのぼったという。屋根に乗っていた人がそ

のまま流されたり、樹木に登った人が木と一緒に流されたり。「人畜の死傷少なき」といふ。  
洪水から2日後、川の淀みとなる神通橋(現在の船橋)下では泥に埋もれた流木を拾うため、七軒町、下木町、下川原町及び橋北(※1)の老若男女、数百人が動員されたのだが、その時、人間や蛇の土左衛門も拾い上げられた。

富山県はこの大洪水の被害総額を「臨時費百万圓以上」と発表。時局切迫の折り、いかにして財源を求めめるかが苦慮された。また水害後の衛生を考えて「大掃除」が励行され、事細かに指示した。浸水した家は床板を取り外し、汚水汚物を清水で洗い流した後、生石灰を敷布。晴天時は窓を開放して乾かし、曇天時には火力で室内を乾燥すること。当時の人々の落胆の姿、無念の思いが伝わってくるようだ。

※1 橋北…旧神通川の北側の地区(現在の牛島、愛宕周辺)は、舟橋を渡って行くことから「橋向かい」、「橋北(きょうほく)」などと呼ばれていた。

# 旧神通川の歴史をたどりながら 馳越を偲ぶ散歩コース

水が流れなくなり長らく放置されていた旧川筋、広大な荒れ地は埋め立てられ、次第に市の発展を象徴する地域となっていた。



▲木町の浜



▲木町の浜を偲ぶ常夜燈

**1 木町の浜**  
北前船が行き交った  
富山城下の要所

いたち川と松川の合流点。佐々成政が富山城主だったころから「木町の浜」と呼ばれている。承応元年（1652）より、は新材の木呂流しが行なわれ、木場川原に陸揚げされていた。江戸時代、神通川やいたち川、常願寺川を行き交う物資の荷揚げ、積み出し場として北前船が行き来するなど、富山城下の舟運の要地となっていた。寛文12年（1672）には、六千石余がここから大阪に積み出されている。

また舟をつないで渡されていた有名な舟橋も、最初はここに架けられていたという。現在は、歴史を偲んだ常夜燈が建てられており、鯉が多く泳いでいる。

**2 万霊塔**  
水死者を慰める  
旧神通川の供養塔

延享3年（1746）、神通川で水死した人々を供養するため建立された「木町の万霊塔」。神通川が蛇行していた頃は、ここに流々とした大河の流れがあった。今も地元に着着しており、花を手向けでゆく人も多い。



# 「桜谷八景」と謳われた風雅の地。

●川がまつすぐになる前、現神通川の水流の向こうに消えた景色。

神通川が直流化する以前、川の湾曲部分の西側には十カ村、駒見、田刈屋、牛島、四つ屋、石坂、石坂新、五艘、安養坊、愛宕、畑中からなる桜谷村が広がっていた。（7ページ左上の地図参照）桜谷村は、川の湾曲部分のすぐ脇にあったことから水害を被ることが多かった反面、かつて「一目千本」と謳われる桜の名所で多くの人々に愛され、富山藩



▲越中桜谷花見の図。売菜さんが持って全国を回ったおみやげの富山版画から。淡いピンク色がきれい。

八代藩主・前田利謙の生母、自仙院佳子夫人もたびたびこの地に来遊。寛政10年には、桜谷八景の歌「桜谷晴風」「呉服秋月」「岩瀬帰帆」「草島落雁」「立山暮雪」「舟橋夕照」「百塚夜雨」「愛宕晚鐘」を読んで長慶寺の人摩堂に奉納もされている。

神通川の河身の変更によって移住を余儀なくされ、東西に二分された桜谷

村。神通川に現在の富山北大橋が架けられた時、桜谷の方々はじめ多くの人が、なぜ桜谷大橋という名称にしないのか、という疑問を持った。

その当時、歴史家の前田英雄さんは桜谷の人々に頼まれ、左の文章を新聞に投稿している。

——時代は古いとはいえず、旧桜谷の人々が父祖伝来の土地を、富山市の人々のために提供して移住したことを忘れてはならないと思っております。

富山市を南北に分断していた神通川とその廃川地は、埋め立てによって今や富山市の行政、企業、マスコミなどの中核地帯となり、富山市が近代都市として発展したのです。

その遠因が当時の桜谷村の人々のおかげによると言っても言い過ぎではないと思います。——



た。舟橋は初め前田利家によつて木町に架けられていたが、約60年後、利次の代に町並み改正の為此らへ移された。世に「越中富山神通川船橋」と謳われ、売薬、時鐘とともに富山三名物の一つとして全国に知られていた。旧神通川の兩岸にあって人々の道中を照らしていたのが、この2基の常夜燈である。

常夜燈は、寛政11年に手伝町年寄 内山権左衛門によつて寄進されたもので、金比羅大権現を勧請し往来の人々の安全を守護した。戦火をくぐり抜け今も残る唯一の遺物。

▲南の常夜燈  
空襲の傷跡が生々しい。

5 旧神通川の堤防跡  
神通川が蛇行していた頃、この道筋が左岸の第二堤防だった。現在は住宅街のほんの一本の道にすぎず、神通川とほぼ垂直に延びている点がるほどなと伺えるくらい。しかし昔を忍びながら、寺社を辿りつつ歩いていくと感慨深いものが胸をよぎる。



▲神通大橋の東詰から上流へ堤防沿いに行くくと左手に白い倉庫のような建物があり、そこを左へ入った道が蛇行していた頃の旧神通川左岸の第2堤防跡。  
◀ 道沿い左側に神社、乗光寺、愛宕神社がある。

6 富山停車場跡  
明治32年、敦賀から富山まで敦富(とんぶ)鉄道が開通。神通川の川筋が変わる馳越の計画や、本駅の設置場所が未定だったことから、その手前、今の桜谷小学校の東の方に停車場が設けられた。周辺は客待ちの人力車、宿屋や茶屋土産もの屋で大変賑わった。

富山市初の停車場は田刈屋にあった。



▲田刈屋にある富山停車場跡



▲田刈屋にあった頃の停車場

●協力 富山市郷土博物館/富山県郷土史学会長・八尾正治氏/富山県公文書館/越中史壇会理事・前田英雄氏  
●参考資料 「北陸政報」/「ふるさとの想い出写真集 明治 大正 昭和 富山」八尾正治編・国書刊行会/「神通川とその流域史」高瀬信隆/「桜谷郷土史」/「船橋向かいものがたり-愛宕の沿革」水間直二編・富山県の民衆史を掘りおこす会/富山市史/「博物館だより」富山市郷土博物館/「新聞に見る20世紀の富山特」北日本新聞社/「とよま土木物語」白井芳樹著・富山新聞社

越中名物「舟橋」の唯一現存している面影。

3 常夜燈

64艘の船を鉄鎖でつないだ浮き橋「舟橋」がここに架かっていた。



▲越中富山神通川船橋図



▲開通から6年後、明治42年の神通大橋。全長410メートル、幅6メートル。



▲今の神通大橋

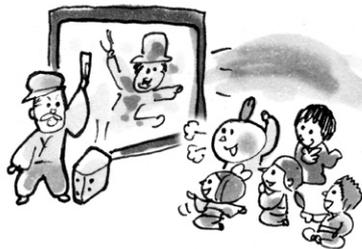
4 神通大橋

「馳越線」に初めて架かった橋

馳越線の開削の完成とともに、明治36年5月25日に架けられている。現在のものは昭和44年に完成した2代目。今は神通川の立派な本流となつているが、「馳越線」ができた当初は水路幅が2メートルしかなかった。その水路になぜ長さ410メートルのこの橋が架かったのかというと、水流によって水路幅が削られていくのを見越していたため。当時、船頭さん達の間では「はせこじの橋」と呼ばれていた。



▲神通大橋東詰からの現在の眺め。馳越工事が行われる前はこの川筋に桜谷村が広がっていた。



道が作られていた。高さは4メートルくらいだったと思う。その道の片側(西側)には、バラック建ての店が何軒か並んでおり、総曲輪などから見たらそんなに賑やかしいものではなかったが、地元では「舟橋売店」と呼んでいた。その中でも覚えているのは眼鏡屋と古本屋。古本屋の息子が一級上の先輩だったからよく覚え

ている。漁で使う長靴が破れたりしても、古本屋へ行くとそのおとつあんが靴を直してくれた。土盛りの道の端には廃川地へ下りられる階段があつて、お盆にはそこで映画会があつた。夕涼みがてら、ごきぎを持ってみんなよく出かけて行ったものだ。チャーリー・チャップリン、ハロルド・ロイドの喜劇。昔はトーカーでなく活弁だったので、弁士の上手、下手で笑いも違った。そして岩瀬へ海水浴に行く時には、七軒町の自宅から廃川地の神通グラウンドを横切つて奥田の方へ抜けて、近道をしていった。懐かしい神通川の思い出。⑥



※イメージイラストです。

おやじと漁に出るようになった昭和10年頃、神通川には、酒や鮎料理を出すような大きな屋形船が浮かんでいました。富山大橋の西詰めあたりに一番最初は「神通丸」というのがあつて、その後、空襲で焼けてからは経営者も変わり「千歳丸」というのになった。花火大会の夜には、たくさんの屋形船が赤いちょうちんをぶらさげて神通川にくり出し、船に揺られて大花火見物。その頃の花火は今みた

いに連続しては上がらず、一発ドーンとなつたら後は3分ほど間があつて、その間に酒を飲んだり、鮎を食べたりしていた。そしてその頃はどの家でも犬は放し飼いにしてあつて、街で飲んできた夜遅くに、犬が川辺りまで迎えに来ていたこともあつた。昔の神通川の跡地は廃川地と呼ばれていた。舟橋のあとに架けられていた神通橋は撤去され、廃川地には土盛りの

# ●船頭さんの馳越むかし語り 昭和初期の神通川、情緒溢れる夏。



藤田清五郎さん  
大正9年6月9日生まれ。船頭歴67年。神通川での鮎漁の傍ら、松川遊覧船の船頭を務める。

**博士と楽しい夏休み!!**

「ど〜んと納涼夏まつり〜緑日気分で大実験〜」 緑日の雰囲気やラゴで再演! 持っている知識をフル動員させて、ゲームや工作に挑戦だ!!  
8月9日◎・10日◎ 午前11:00〜午後4:30 ※当日自由参加、有料です。

「ミニ化学 ワクワク・ドキドキふしぎ体験」 何百万種類にもおよぶ物質。身近にある物質を理解し、その奥にひそむ法則を学ぶ旅にいっしょにでかけよう!  
8月15日◎〜18日◎ 午前10:30〜午後3:30 ※当日自由参加

科学実験発表コンクール 小学生の部・中学生の部・高校生の部 新設  
第7回 集まれ! ワンダー博士 ※中学生以下は個人または3名以内のグループ、高校生は個人参加  
応募期間/7月1日◎〜7月31日◎ 発表日/8月24日◎

開館時間/10:30〜18:30 休館日/毎週月曜日・年末年始(12/31〜1/3) 入館料/無料  
お問い合わせ/〒930-0858 富山市中島町18-7  
アーバンプレイス 3-4F  
TEL 076(433)9933 FAX 076(433)9934  
ホームページ/http://www.rikuden.co.jp/wonder  
E-mail/wonder@ym.fitweb.or.jp

ワンダー博士の教室へ行く! 北陸電力エネルギー科学館 ワンダーラボ